

ヨブ記32-36章21節「神の偉大さの擁護」

1A 唇を開くエリフ 32

- 1B 燃える怒り 1-5
- 2B 罪を認めさせない友人 6-14
- 3B はち切れるばかりの腹 15-22

2A 教育的配慮 33

- 1B 聞いてもらう嘆願 1-11
- 2B 苦しみの中での語りかけ 12-28
- 3B 機会を与える神 29-33

3A 神を悪とする悪 34

- 1B 良いことの見分け 1-9
- 2B 神が裁かれる方 10-30
- 3B 言い返す罪 31-37

4A 影響を与えられない神 35

- 1B 自分にだけ関わる正しさ 1-8
- 2B 主を待って答えを聞く 9-16

5A 怒りを蓄える自分 36

- 1B 聞き入れる人 1-12
- 2B 苦しみの中に沈みこむ人 13-21

本文

ヨブ記 32 章です。今日は、エリフの言葉を 32 章から 36 章の 21 節まで読みたいと思います。32 章 22 節以降は次回に譲りたいと思います。初めに、エリフが怒りを燃やしたところから話が始まります。それで、なぜそうなってしまったのか、ヨブが語った最後の言葉を読みたいと思います。「だれか私に聞いてくれる者はないものか。見よ。私を確認してくださる方、全能者が私に答えてくださる。私を訴える者が書いた告訴状があれば、私はそれを肩に負い、冠のように、それをこの身に結びつけ、私の歩みの数をこの方に告げ、君主のようにして近づきたい。」

ここにある「私を訴える者は」というのは、「訴える方は」と言い換えたら分かると思います。これまでのヨブの言葉を聞くならば、今ヨブが行っているのは、神が自分に与えた苦しみによって告訴しているので、その告訴状をもって大胆に出頭したい、ということでもあります。「私は正しく潔白である、私は無罪を証明できる。全能者であられる神よ、あなたが今度は陳述せねばなりません。」ということです。裁判所に見立てて、なぜ自分がこんなに苦しまなければいけないのか、神にその回答を要求しているということです。そこで 32 章に入ります。

1A 唇を開くエリフ 32

1B 燃える怒り 1-5

32:1 この三人の者はヨブに答えるのをやめた。それはヨブが自分は正しいと思っていたからである。

友人は、何とかして彼が罪を犯したのだと認めさせようとしていました。この苦しみを受けているのは、彼の罪のせいであると主張していましたが、ヨブは負けませんでした。彼らの主張がいかに陳腐なものであるかを、彼ら以上に神の知識をもって圧倒し、彼らを黙らせました。そして最後に、自分が如何に潔癖であるのかを具体例を出して論証し、そして神に対して回答を求めたのです。

32:2 すると、ラム族のブズ人、バラクエルの子エリフが怒りを燃やした。彼がヨブに向かって怒りを燃やしたのは、ヨブが神よりもむしろ自分自身を義としたからである。

エリフという人物について、32章から37章の彼の言葉以外、他の箇所には出てきません。この自己紹介から、ヨブとは縁戚であることが分かります。ブズ人ということですが、ヨブはウツの地にいた人であるとヨブ記の冒頭にあります。アブラハムの縁戚について、創世記22章20-22節にこうあります。「ミルカもまた、あなたの兄弟ナホルに子どもを産みました。すなわち長男がウツ、その弟がブズ、それにアラムの父であるケムエル、次にケセデ、ハヅ、ピルダシュ、イデラフ、それにベトエルです。」おそらく、こうした関係から彼が、その傍らにいたものと思われる。

32:3 彼はまた、その三人の友に向かって怒りを燃やした。彼らがヨブを罪ある者としながら、言い返すことができなかったからである。32:4 エリフはヨブに語りかけようと待っていた。彼らが自分よりも年長だったからである。32:5 しかし、エリフは三人の者の口に答えがないのを見て、怒りを燃やした。

私は、もっと若い世代のクリスチャンに出会うようになって自分は古い世代になってきているな、と思うと同時に、エリフの怒りを読むと自分はまだ若いなと感じます。何度となく、この怒りを経験しました。ある事について「これは、間違っている教えでしょう？」と何年も思っているのですが、もっと経験豊富で、長いこと牧会している人々であれば分かってくれているだろうと思い、黙っていました。けれども結局、何も答えがないのです。そりゃあ、腹が立ちましたね。この経験の少ない僕が気づいているのに、なぜこんなにしっかりと、尊敬している貴方がたが、こんな単純なことに気づかないのですか？ということですよ。

2B 罪を認めさせない友人 6-14

32:6 ブズ人、バラクエルの子エリフは答えて言った。私は若く、あなたがたは年寄りだ。だから、わきに控えて、遠慮し、あなたがたに私の意見を述べなかつた。32:7 私は思った。「日を重ねた者が語り、年の多い者が知恵を教える。」と。32:8 しかし、人の中には確かに霊がある。全能者

の息が人に悟りを与える。32:9 年長者が知恵深いわけではない。老人が道理をわきまえるわけでもない。32:10 だから、私は言う。「私の言うことを聞いてくれ。私も、また私の意見を述べよう。」

これは、その通りですね。確かに、歳を取ればそれだけ”年の功”と言われるように知恵が与えられます。しかし、神の御霊に感じて語るのには歳は関係ありません。ここに、「全能者の息が人に悟りを与える」とありますが、ヘブル語では息も霊も同じ言葉です。ですから霊については人の経験とは別個に存在しています。若者も御霊を受けて、神の言葉を語ることができます。「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。(ヨエル 2:28)」

32:11 今まで私はあなたがたの言うことに期待し、あなたがたの言い分を調べ上げるまで、あなたがたの意見に耳を傾けていた。32:12 私はあなたがたに注意を払っていたのに、ヨブに罪を認めさせる者はなく、あなたがたのうちで彼のことに答える者もない。32:13 だが、おそらくあなたがたは言おう。「私たちは知恵を見いだした。人ではなく、神が彼を吹き払った。」と。32:14 彼はまだ私に向かってことばを並べたててはいない。私はあなたがたのような言い方では彼に答えまい。

13 節の、「私たちは知恵を見いだした。人ではなく、神が彼を吹き払った。」というのは、言い訳の言葉です。「ヨブは何も分かっていない。でも人間ではなく、神が彼を裁くのみだ。」と言っているのですが、これは何も自分たちができていないことの言い訳ではないか、ということです。これは、確かに時々ありますね。何か大変なことが起こった時に、自分が何もしたくない、自分はそれに関わりたくないと思ったら、「主が何とかしてくださいますよ。」という言い訳をしてしまいます。神の名を使って、自分の無責任を言い訳しているのです。

そしてエリフは、「私はあなたがたのような言い方では彼に答えまい。」と言っています。そうです、これからエリフは、ヨブの友人たちの言っている、人の受けている苦しみに対して、それはその人の罪に対する罰だという見方以上の、非常に細やかな、より優れた見方を提供します。

3B はち切れるばかりの腹 15-22

32:15 彼らはあきれて、もう答えない。彼らの言うことばもなくなった。32:16 彼らが語らず、そのままじっと答えないからといって、私は待っていなければならないだろうか。32:17 私は私で自分の言い分を言い返し、私の意見を述べてみよう。32:18 私にはことばがあふれており、一つの霊が私を圧迫している。私の腹を。32:19 今、私の腹は抜け口のないぶどう酒のようだ。新しいぶどう酒の皮袋のように、今にも張り裂けようとしている。32:20 私は語って、気分を晴らしたい。くちびるを開いて答えたい。

これまで聞いてきたことを、自分なりに整理し、そしてそれが彼の信じる神からの思いによって霊

がいっぱいになっていることを言い表しています。ぶどう酒の皮袋の例えを使っていますが、これがまさに、イエス様が使われた、新しいぶどう酒には新しい皮袋にと同じ現象です。発酵するので古い皮袋のような固いものだと割れてしまいます。新しい皮袋のように柔軟性のあるものでなければ、その発酵による気化を受け取ることができません。

32:21 私はだれをもひいきしない。どんな人にもへつらわない。32:22 へつらうことを知らないから。そうでなければ、私を造った方は今すぐ、私を奪い去ろう。

午前礼拝でも話しましたが、確かにへつらいは罪であります。自分を守るため、自分がよく見られるため、あるいは何か利益を得るために、人々に良い言葉をかけることは聖書で罪とされます。「ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。(1テサ 2:5)」

2A 教育的配慮 33

1B 聞いてもらう嘆願 1-11

33:1 そこでヨブよ。どうか、私の言い分を聞いてほしい。私のすべてのことばに耳を傾けてほしい。
33:2 さあ、私は口を開き、私の舌はこの口の中で語ろう。33:3 私の言うことは真心からだ。私のくちびるは、きよく知識を語る。33:4 神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを与える。

エリフは、これから話すことが神の靈感によるものであると言っています。すなわち、神の預言者と同じ位置につけています。確かに、彼の言葉は聖書に書き記されることになりました。しかし、それが神の真理の言葉であるのかどうかは、吟味が必要です。

ある注解において、エリフとエレミヤを比べているものがありました。とても興味深いです。エレミヤも、若い時に神に召されました(エレミヤ 1:5-7)。そして、エレミヤもエリフと同じように、どうしても語らなくてはならない切羽詰まった体験がありました。「私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。(20:9)」そして、エレミヤの言葉は決して優しいものではありませんでした。ユダが裁かれる、バビロンに服しなさいという厳しい言葉でした。しかし、エレミヤと同じように、エリフのこれからの言葉を神そのものの言葉として受け取ることができるでしょうか。

私は、できないと思います。エリフの言葉から多くを学ぶことはできますが、エレミヤか主が言われると言って語った神の言葉とは大きな違いを見ます。それは、神ご自身がエレミヤを召したということが一つに上げられます。エリフは自ら、自分は神の霊によって語っていると言っていますが、エレミヤは神ご自身が言葉を彼に与えると言っています。

そして、もう一つ大きな要素があります。それは、エレミヤは涙を流して、嘆きながら神の裁きを宣言したことです。言い換えるなら、エレミヤは自分自身がユダヤ人であり、ユダとエルサレムが破壊されることを最も望んでいなかった、ということです。自分の語っている対象と、自分は一体なのだということです。人間的に言い方をすれば、当事者意識であります。神がお示しになった当事者意識は、イエス・キリストご自身であります。公生涯を始められる時に、キリストの弟子が受けるべきバプテスマをご自身が受けられ、彼らと一体になって神の言葉を語られました。ゆえに、その語る言葉が確かに神の言葉であることが分かるのです。

33:5 あなたにできれば、私に返事をし、ことばを並べたて、私の前に立ってみよ。33:6 実に、神にとって、私はあなたと同様だ。私もまた粘土で形造られた。33:7 見よ。私のおどしも、あなたをおびえさせない。私が強く圧しても、あなたには重くない。

エリフなりのヨブへの配慮です。もちろん、全然配慮になっていないのですが……。これから語ることは、ヨブにとって脅しのように聞こえるかもしれない。けれども、私はあなたと同じ土から造られた人間だ。だから、あなたには心理的圧迫にならないだろうから、私が言ったことにも返事してみよ、と言っています。

33:8 確かにあなたは、この耳に言った。私はあなたの話す声を聞いた。33:9 「私はきよく、そむきの罪を犯さなかった。私は純潔で、よこしまなことがない。33:10 それなのに、神は私を攻める口実を見つけ、私を敵のようにみなされる。33:11 神は私の足にかせをはめ、私の歩みをことごとく見張る。」

確かに、ヨブが語っていたことは基本的にこれです。ヨブの友人たちは、9 節の言葉、ヨブがきよく、そむきの罪を犯さなかったと言っているところに彼らなりの問題を感じていました。ですから、友人たちの焦点は、ヨブ自身でした。彼が悪いことをしたのだ、ということでした。けれども、エリフの焦点は 10 節にあります。「それなのに、神は…」という所です。ヨブが神を責めている、神が正しくないとしているところに問題を感じているのです。

2B 苦しみの中での語りかけ 12-28

33:12 聞け。私はあなたに答える。このことであなたは正しくない。神は人よりも偉大だからである。

これが、これからエリフが語る基本になります。ヨブは神よりも自分自身を義としていったとエリフはみなしました。そして神が偉大な方であることを彼は強調していきます。

33:13 なぜ、あなたは神と言い争うのか。自分のことばに神がいちいち答えてくださらないというて。

ヨブは、これまで神に対して訴えをしてきました。その度に、沈黙でありました。どんなに問うても神の声がなかったのです。それで、彼は神と裁判所に入って訴訟したいと行っていました。

33:14 神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。33:15 夜の幻と、夢の中で、または深い眠りが人々を襲うとき、あるいは寝床の上でまどろむとき、33:16 そのとき、神はその人たちの耳を開き、このような恐ろしいかたちで彼らをおびえさせ、33:17 人にその悪いわざを取り除かせ、人間から高ぶりを離れさせる。33:18 神は人のたましいが、よみの穴に、はいらないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。

これが、大変深い内容です。神からの語りかけがない、というけれども、実は語りかけを私たちは受けているのだということです。ここで語られているのは、悪夢でありましょう。このような嫌な経験を通して、神が何かを教えておられるということです。

この根底にある考えは、「神の教育」と言ったらよいでしょうか。エリフが 18 節で、「滅びないようにされる」と言っている点に注目してください。苦しみを与えられている時に、それが罪に対する罰ではなく、罪をこれから犯さないようにする予防として語っているということです。子供礼拝の準備の学びを取った方は「罰と矯正の違い」について学ばれたかと思います。叱る時に、やってしまったことを罰するのではなく、これからやらないように正す、ということでもあります。

これはヘブル書 12 章 10-11 節にある考えです。「なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」神の懲らしめ、あるいは訓練であります。苦しむ時に、主が何かを教えてください。そして、自分の罪が示されて、そこから離れて、ますます神の聖さにあずかるようになっていく、という過程、プロセスであります。

33:19 あるいは、人を床の上で痛みによって責め、その骨の多くをしびれさせる。33:20 彼のいのちは食物をいとい、そのたましいはうまい物をいとう。33:21 その肉は衰え果てて見えなくなり、見えなかった骨があらわになる。33:22 そのたましいはよみの穴に近づき、そのいのちは殺す者たちに近づく。

肉体の痛みも、神が語りかけられる大きな要素になります。C.S.ルイスは、「痛みは、神のメガホンだ」と言いました。神が痛みを通して大声で語っておられるということです。まさに、ヨブがこれに当てはまります。さらに、悪夢についてもヨブがそうであったからエリフはその例も取り上げたのでしょう。彼は寝ている時に特に痛みが激しいから、寝ることも休まらない話をしていましたから、その時に悪夢を見ていたのかもしれませんが。

33:23 もし彼のそばに、ひとりの御使い、すなわち千人にひとりの代言者がおり、それが人に代わってその正しさを告げてくれるなら、33:24 神は彼をあわれんで仰せられる。「彼を救って、よみの穴に下って行かないようにせよ。わたしは身代金を得た。」

すごいですね、仲介者の存在をエリフも話しています。無限大の全能者の神と、有限の自分とは大きな開きがあることはヨブがずっと話していました。だから仲裁者がほしいと願い、仲裁者いて保証してくれると断言し、ついに、自分を贖う者が来られると宣言しました。エリフも、ヨブのこの肉体における苦しみを代弁して、全能者に執り成しをしてくれる、その存在を認めているのです。そして、もちろんその存在は、イエス・キリストに他なりません。

33:25 彼の肉は幼子のように、まるまる太り、彼は青年のころに戻る。33:26 彼が神に祈ると、彼は受け入れられる。彼は喜びをもって御顔を見、神はその人に彼の義を報いてくださる。33:27 彼は人々を見つめて言う。「私は罪を犯し、正しい事を曲げた。しかし、神は私のようにではなかった。33:28 神は私のたましいを贖ってよみの穴に下らせず、私のいのちは光を見る。」と。

これは、まさにヨブが最後に経験することです。42 章に書かれていますが、ヨブは病が癒されます。そして、神に祈りました。友人のための執り成しの祈りを捧げました。そして彼に喜びが戻り、また彼の義に報いて二倍の祝福を受けました。興味深いのは、エリフはヨブに義がないと言っていないことです。これが友人と大きく違うことです。そして、ヨブは、正しい事を曲げたことを神に対して告白し、悔い改めています。実際に、その通りになりました。

3B 機会を与える神 29-33

33:29 見よ。神はこれらすべてのことを、二度も三度も人に行なわれ、33:30 人のたましいをよみの穴から引き戻し、いのちの光で照らされる。

これも慰めに満ちた言葉であります。二度も三度も人に行われる、というところですか。一度失敗したら再起不能ではないのです。神の恵みは、二度目のチャンス、三度目のチャンスを与えてくださいます。

33:31 耳を貸せ。ヨブ。私に聞け。黙れ。私が語ろう。33:32 もし、言い分があるならば、私に言い返せ。言ってみよ。あなたの正しいことを示してほしいからだ。33:33 そうでなければ私に聞け。黙れ。あなたに知恵を教えよう。

なぜ、ヨブも友人も反論の声がなく、エリフだけが語り続けていたのか、ここから垣間見ることができます。言い分があれば語れ、と言っているくせに、「黙れ」と二度も言っています。何かヨブが言おうとする仕草をしたのでしょうか、けれども、それを制止して語っているのです。彼はヨブに語る機会を与えているのですが、語らせる時間は与えていません。

エリフの問題はここにあったと思います。つまり、「沈黙」です。沈黙の時間がありませんでした。彼は語り続け、ついに嵐がやって来ました。それでも彼は嵐を使って神のことを語り始めました。けれどもそれは、神が語り始められる前触れでした。それにも拘らず彼は語っていました。それで神が入り込んで、ヨブに語り始めてようやくエリフは口を閉ざしたのです。しかし人が本当に変わるには、神ご自身が語られる時間が必要です。そして、その語りかけを受けるのは、時間が必要なのです。その時間の中に神の語りかけ、静かな囁き声が聞こえるのです。

3A 神を悪とする悪 34

1B 良いことの見分け 1-9

34:1 エリフは続けて言った。34:2 知恵のある人々よ。私の言い分を聞け。知識のある人々よ。私に耳を傾けよ。34:3 口が食物の味を知るように、耳はことばを聞き分ける。34:4 さあ、私たちは一つの定めを選び取り、私たちの間で何が良いことであるかを見分けよう。

エリフは、今度は、ヨブだけでなく友人三人も含めて話しています。そして、あなたがたならば聞き分けることができるから、何が良いことかを見分けていこうと言っています。

34:5 ヨブはかつてこう言った。「私は正しい。神が私の正義を取り去った。34:6 私は自分の正義に反して、まやかしを言えようか。私はそむきの罪を犯していないが、私の矢傷は直らない。」34:7 ヨブのような人がほかにあろうか。彼はあざけりを水のようにのみ、34:8 不法を行なう者どもとよく交わり、悪人たちとともに歩んだ。34:9 彼は言った。「神と親しんでも、それは人の役に立たない。」

エリフは、ヨブの友人三人と同じように、ものすごい勢いでヨブを悪人と交わっていると責めています。けれども、友人三人と根拠は違います。それは、「神が正義を取り去った」と彼が言ったからです。この部分に、神への冒瀆に聞こえる部分にエリフは強く反応しています。そして、「神と親しんでも、役に立たない」と言う言葉も引用していますが、それは 35 章で取り扱います。まず、神は、自分の正義を取り去ったというところを批判します。

2B 神が裁かれる方 10-30

34:10 だから、あなたがた分別のある人々よ。私に聞け。神が悪を行なうなど、全能者が不正をするなど、絶対にそういうことはない。34:11 神は、人の行ないをその身に報い、人に、それぞれ自分の道を見つけるようにされる。34:12 神は決して悪を行なわない。全能者は公義を曲げない。

神が自分に対して正義をもって接していない、不正義な扱いをしていると言っていることに対して、エリフは非常に怒っていました。神は神であり、もし神が義でなければ神ではなくなるのです。ですから、たとえ悪いことが起こっても、それは人間のもたらしたものであって、神がその悪を行なったのではないのだということです。これも正しいです。ヤコブが手紙の中でこう言いました。「すべて

の良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。(1:17)」そして、神は人を誘惑されるような方ではない、とも言っています。

34:13 だれが、この地を神にゆだねたのか。だれが、全世界を神に任せたのか。34:14 もし、神がご自分だけに心を留め、その霊と息をご自分に集められたら、34:15 すべての肉なるものは共に息絶え、人はちりに帰る。

エリフは、神と人間との圧倒的な違いを述べています。ほんの少しでも息をさせることをやめさせようと思われるなら、今この瞬間、全ての人息を止めることができなくなります。あなたは、その口で神を非難しているが、その息さえも神の御手の中にあるのだということを言いたいのでしょう。事実、偶像の神々をほめたたえていた、バビロンの最後の王ベルシャツアルに対して、ダニエルがこう言いました。「あなたの息と、あなたのすべての道をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。(5:23)」

34:16 あなたに悟りがあるなら、これを聞け。私の話す声に耳を傾けよ。34:17 いったい、公義を憎む者が治めることができようか。正しく力ある方を、あなたは罪に定めることができようか。34:18 人が王に向かって、「よしまな者。」と言い、高貴な人に向かって、「悪者。」と言えるだろうか。

16 節からは、ヨブ一人に話しています。主語が「あなたに」と単数に戻っています。エリフは、神は義であることを述べた後に、もし神が義でなければ、正しく治めるということさえできないではないか？ということです。ヨブが、首長たちをも選ぶ治める地位についていたことを思い出してください(29:25)。彼は正しく治めることができていたのです。その権威は、神から来ています。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」したがって、もし神の義を否定してしまうのであれば、この世界に秩序というものが存在しなくなるのではないか、という訴えです。

34:19 この方は首長たちを、えこひいきせず、貧民よりも上流の人を重んじることはない。なぜなら、彼らはみな、神の御手のわざだから。34:20 彼らはまたたくまに、それも真夜中に死に、民は震えて過ぎ去る。強い者たちも人の手によらないで取り去られる。

この世において、悪い政治があります。治めている者たちに不義があり、それによって不条理なことが起こります。しかし、これをもって神が悪であるということは決してできない、断じてないということをエリフは言っています。なぜなら、そのような悪意をもって権威をふるっている者たちは、必ず神が滅ぼされるのだから、ということです。

34:21 神の御目が人の道の上であり、その歩みをすべて見ているからだ。34:22 不法を行なう者どもが身を隠せるような、やみもなく、暗黒もない。34:23 人がさばきのときに神のみもとに出るのに、神は人について、そのほか何も定めておられないからだ。34:24 神は力ある者を取り調べることなく打ち滅ぼし、これに代えて他の者を立てられる。34:25 神は彼らのしたことを知っておられるので、夜、彼らをくつがえされる。こうして彼らは砕かれる。34:26 神は、人々の見ているところで、彼らを、悪者として打たれる。34:27 それは、彼らが神にそむいて従わず、神のすべての道に心を留めなかったからである。

もし、神が正しく治めていないというならば、それは神の目が節穴だということになってしまいます。確かに人であれば、全てのことを知っているのではないですから、誤った裁きをします。しかし神にはそれはあり得ません、なぜなら全てを見ておられるからです。だから、必ず裁かれるのだということです。

34:28 こうして彼らは寄るべのない者の叫びを神の耳に入れるようにし、神は悩める者の叫びを聞き入れられる。34:29 神が黙っておられるとき、だれが神をとがめえよう。神が御顔を隠されるとき、だれが神を認めえよう。一つの国民にも、ひとりの人にも同様だ。34:30 神を敬わない人間が治めないために、民をわなにかける者がいなくなるために。

神は、必ず寄るべのない者の叫びを聞かれているし、悩める者の叫びも聞き入れておられます。しかし、そのように見えない時があります。だからといって、どうして神を咎めることができるのか？と言っています。ヨブは確かに、この点について神を責めていました。「なぜ、全能者によって時が隠されていないのに、神を知る者たちがその日を見ないのか。(24:1)」しかし、神は確かに裁かれています。例えばノアの時代、百二十年間、悪がはびこるのをお許しになりました。それは、罪人が悔い改めるためでありましたが、けれども水をもって裁かれました。だから、その悪がはびこるを見て、神は見えておられない、叫びを聞いておられないとするのは、何事か！と怒っているのです。

3B 言い返す罪 31-37

34:31 神に向かってだれが言ったのか。「私は懲らしめを受けました。私はもう罪を犯しません。34:32 私の見ないことをあなたが私に教えてください。私が不正をしたのでしたら、もういたしません。」と。34:33 あなたが反対するからといって、神はあなたの願うとおりに報復なさるだろうか。私ではなく、あなたが選ぶがよい。あなたの知っていることを言うがよい。

エリフは、悔い改めを迫っています。自分が知っているかのように話したことが、エリフにとってはヨブが悔い改めなければいけないことです。「私の見ないことをあなたが私に教えてください。」という言葉がそれです。そして、ヨブがいくら反対していても、神は自分の願うように報われる方ではない、自分の方法で神が応じる必要はないのだ、と言っています。そして、自分で選んで、悔い

改めの言葉を話さないかと勧めています。

34:34 分別のある人々や、私に聞く、知恵のある人は私に言う。34:35 「ヨブは知識がなくて語る。彼のことはには思慮がない。」と。34:36 どうか、ヨブが最後までためされるように。彼は不法者のように言い返しをするから。34:37 彼は、自分の罪にそむきの罪を加え、私たちの間で手を打ち鳴らし、神に対してことば数を多くする。

エリフの焦点は、ヨブが苦しみにあっているからといって、それで神に言い返しをする権利はない。手を打ちならすのは、口論をしている時、熱くなってそうした身振りをします。だから、私たちはヨブとその友人の言葉だけを読んでいましたが、かなり身振りや手ぶりがあって、激しいやりとりがあったのではないのでしょうか。それをしながら神に対して言葉数だけを多くしていると言っています。

いかがでしょうか？エリフはヨブに悔い改めを迫りました。確かに友人三人より、はるかに的をいっています。友人三人は、ヨブが実際に何か悪いことを行なっているからそれを悔い改めよ、と言っているのに対して、彼は、ヨブが自分の正しさを証明するために神を非難していることを悔い改めよ、と言っているのです。ですから、尤もな意見なのです。しかし、私は思います。こんな畳みかけのような議論で、それで悔い改めを迫られても無理というものです。

しかし、神に語りかけられた時、その言葉は確かにエリフと同じように次々と矢継ぎ早に神も、ヨブに問い質していかれます。しかし、ヨブは悔い改めることができました。この違いは何か？エリフが神ではない、ということです。正しいことを話しても、本人が神に語りかけられない限り、人は自分を変えることはできません。

4A 影響を与えられない神 35

そして、エリフの主張は続きます。

1B 自分にだけ関わる正しさ 1-8

35:1 エリフはさらに続けて言った。35:2 あなたはこのことを正義によると思うのか。「私の義は神からだ。」とも言うのか。35:3 あなたは言っている。「何があなたの役に立つのでしょうか。私が罪を犯さないと、どんな利益がありましょうか。」と。

ヨブは、自分がどのようなことをしても、この苦しみから解き放つことはしないだろうと思っていました。そしてこう言いました。「私はきつと、罪ある者とされましよう。ではなぜ、私はいたずらに労するのでしょうか。(9:29)」これは、絶望して、疲れ果ててしまったつぶやいた言葉です。この言葉に対して、エリフは答えます。

35:4 私はあなたと、またあなたとともにいるあなたの友人たちに答えて言おう。35:5 天を仰ぎ見

よ。あなたより、はるかに高い雲を見よ。35:6 あなたが罪を犯しても、神に対して何ができよう。あなたのそむきの罪が多くても、あなたは神に何をなしえようか。35:7 あなたが正しくても、あなたは神に何を与えようか。神は、あなたの手から何を受けられるだろうか。35:8 あなたの悪は、ただ、あなたのような人間に、あなたの正しさは、ただ、人の子に、かかわりを持つだけだ。

ヨブだけでなく、友人三人にも語り始めています。天を見上げれば、神の偉大さが分かります。そして、このような小さな者たちが罪を犯した、義を行なったところで、それによって神が影響を受けよう方ではない、ということです。確かに、罪を犯したところで神の義に支障が来ることはありません。ただその罪を裁くのみです。そして正しいことをしたからといって、神の義に貢献するのでもありません。パウロも、神の主権を取り扱ったローマ9章から11章のところで、結論としてこう言いました。「また、だれが、まず主に与えて、報いを受けるのですか。(34節)」

ヨブだけでなく、友人三人にも話しかけたのは、三人もこのことについて知識が欠けていたとエリフは思ったからだと思います。人が善を行って、また悪を行なってそれによって、神が応答するような方ではない。それでは、神が人間に仕える僕となってしまう。その人のしていることは、その人に報いがあるのであり、神はそのような因果応報的な法則から自由にされている方なのだ、とうことであります。

2B 主を待つて答えを聞く 9-16

35:9 人々は、多くのしいたげのために泣き叫び、力ある者の腕のために助けを叫び求める。
35:10 しかし、だれも問わない。「私の造り主である神はどこにおられるか。夜には、ほめ歌を与え、35:11 地の獣よりも、むしろ、私たちに教え、空の鳥よりも、むしろ、私たちに知恵を授けてくださる方は。」と。35:12 そこでは、彼らが泣き叫んでも答えはない。悪人がおごり高ぶっているからだ。35:13 神は決してむなしい叫びを聞き入れず、全能者はこれに心を留めない。

これは、しばしば私たち人間が、神を責める時に話す言葉です。虐げがあるのに、祈りが聞かれない、ということです。そして、このことはヨブも言いました。けれどもエリフは、答えます。10節は新共同訳のほうが分かりやすいです。「どこにいますのか、わたしの造り主なる神／夜、歌を与える方、地の獣によって教え／空の鳥によって知恵を授ける方は」自然の中に、神がおられることを認めることができます。地の獣、空の鳥を見るだけでも、そこに歌を与える神の声があります。物事を教える主の知恵があります。このようなことを無視して祈り叫んでも、答えが帰ってくるはずがないではないか。それをエリフは、「悪人がおごり高ぶっている」と言っています。

35:14 しかも、あなたは神を見ることができないとやっている。訴えは神の前にある。あなたは神を待て。

ヨブはこのことも話していました。「左に向かって行っても、私は神を見ず、右に向きを変えても、

私は会うことができない。(23:9)」そして、この訴えも私たち多くの人がすることです。神が見えないではないか、と言っています。しかし、やはり自然を見れば、神が存在は明らかなのです。「なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。(ローマ 1:19-20)」

そして、エリフは大事なことを言います。「訴えは神の前にある。あなたは神を待て。」ヨブの訴えは、もう神の前に置かれています。だから待ちなさい、と言っています。神の机には、その書類が置かれているのです。けれども、神が由とするときに行動に移される。だから待ちなさいということです。

35:15 しかし今、神は怒って罰しないだろうか。ひどい罪を知らないだろうか。35:16 ヨブはいたずらに口を大きく開き、知識もなく、自分の言い分を述べたてる。

エリフの怒りは続きます。ヨブが口を開き、神を非難していることに相当、頭に来ているようです。

5A 怒りを蓄える自分 36

ですから、まとめますとエリフは、苦しみというのは神の教育的配慮、訓練であるのだとうことを初め 33 章で話しました。そして、神が不正を行っていることと非難していることに対して、34 章で神は正義であって、悪を行なうことは決してないことを論じました。そして今、35 章で、主が報われない、正しさをもってしても、祈りをもってしても応えてくださらないということに対して、神が人のしていることに対していちいち反応する責任は負っていない、神は主権者であるということをお話しました。

そしてエリフは、神の偉大さを述べます。人に正しく接してくださることについて、21 節まで話します。そして次回学びますが、22 節から 37 章の終わりまで、自然の中に発揮されている力強さについて語ります。それと同時に、ヨブに対して悔い改めの決断を迫り、悔い改めない時の神の裁きも述べます。

1B 聞き入れる人 1-12

36:1 エリフはさらに続けて言った。36:2 しばらく待て。あなたに示そう。まだ、神のために言い分があるからだ。36:3 私は遠くから私の意見を持って来て、私の造り主に義を返そう。36:4 確かに私の言い分は偽りではない。完全な知識を持つ方があなたのそばにいるからだ。

再び、「待て」と言って、相手が何か言おうとしているのを遮っています。エリフの言葉をずっと読んでいて、何かが変わったという思いがしているのは、ここです。確かに、彼の論法は非常に冴えています。これまで見てきたとおり、語っていることは他の聖書箇所からも支持できる内容でありま

す。しかし、何かがおかしい。ヨブの友人三人は、その言っていることがちぐはぐでこそあれ、やりとりがありました。しかし、エリフはどこからともなく出てきて、そして最後は神ご自身によって遮られます。「浮いている」という言葉を使ってもよいでしょうか？

私はその理由が、この言葉にあるのだと思います。「神のために言い分があるからだ。」これが午前礼拝でお話したことです。神に代わって言い分がある・・・そんな馬鹿な話はありません。神は代弁者を必要とはされません。神は助けを必要ありません。神は直接お語りになることができますのです。神は人の助けを必要としません。

これが純粹さや義憤にある落とし穴です。気をつけないといけないのは、神の絶対性が自分に乗り移ります。ヨブをことさらに責め立てていくエリフに、それを見ることができます。怒りに留まっていると自分を失います。なぜなら、怒りは正義から来ていて、正義とは神のみに属するものだからです。したがって、次第に自分を神と同位置に起き、とんでもないことをし始めるのです。正義の名の下で最も醜悪なことを行ないます。例えば、今の社会問題であれば、カルトがそれに当てはまります。カルトにはまる人たちは純粹な人たちが多いです。正義感の強い人たちが多いです。

そして次に起こることは、自己陶醉です。エリフの言動にそれが見えています。遠くから意見を持ってくる。完全な知識を持つ方がおられるなど、神との一体感が特徴です。エリフは、神の完全な知識が自分に宿っているのだというような、私は神と一つになっているという自己陶醉です。そこから、人が人でなくなっています。人間離れしているのです。

これを準備している時に、チャック・スミスの過去の説教原稿を見ていて、興味深い逸話がありました。彼のところには、数々の手紙が届きます。そして、「神のためにお話ししたいことがあります。」という内容の手紙がたくさん届きます。文章は、「あなたの働きにとっても感謝しています。」から始まるのですが、「けれども、御霊がこのように私の心に語られていて、それをお話しせざるをえません。」と続きます。そして、チャックがこういう深刻な問題があることが示されたとか、いろいろ続きます。その、「神のために話したいことがある」という文を見つけたら、署名がどうなっているのかすぐに見るのだそうです。すると自分の名前や所在を明かしていない場合がほとんどとのこと。そして、もちろん、いっしょに会って顔と顔を合わせて話したいということはありません。つまり、神からの言葉だと言いながら文責を明らかにしない、そして当事者間の接触がない、ということがあります。エリフは、そこまで酷くはないですが、独りで話し続けていった理由はその辺りにあるのではないかと思います。

それでは、神の偉大さを説く彼の言葉を読みます。

36:5 見よ。神は強い。だが、だれをもさげすまない。その理解の力は強い。36:6 神は悪者を生かしてはおかず、しいたげられている者には権利を与えられる。36:7 神は、正しい者から目を離

さず、彼らを王たちとともに王座に着け、永遠に座に着かせて、高められる。36:8 もし、彼らが鎖で縛られ、悩みのなわに捕えられると、36:9 そのとき、神は、彼らのしたことを彼らに告げ、彼らがおごり高ぶったそむきの罪を告げる。36:10 神は彼らの耳を開いて戒め、悪から立ち返るように命じる。

神が人を正しく治め、導いてくださいます。そして、罪から来る苦しみではなく、罪に陥らないようにするための戒めとして、神が悩みを与えられるという、教育的配慮、訓練、懲らしめの話をしています。

36:11 もし彼らが聞き入れて仕えるなら、彼らはその日々をしあわせのうちに全うし、その年々を楽しく過ごす。36:12 しかし、もし聞き入れなければ、彼らは槍によって滅び、知識を持たないで息絶える。

神の戒めに対して、二つの選択があります。一つが聞き入れること、そうすれば幸せが与えられます。もう一つは聞き入れないこと。そうすれば息絶えます。

2B 苦しみの中に沈みこむ人 13-21

36:13 心で神を敬わない者は、怒りをたくわえ、神が彼らを縛るとき、彼らは助けを求めて叫ばない。36:14 彼らのたましいは若くして死に、そのいのちは腐れている。36:15 神は悩んでいる者とその悩みの中で助け出し、そのしいたげの中で彼らの耳を開かれる。36:16 まことに、神はあなたを苦しみの中から誘い出し、束縛のない広い所に導き、あなたの食卓には、あぶらぎった食物が備えられる。

苦しみに遭っているとき、それが、神が語っておられる大きな機会だ。それを聞くならば、これまでにない霊的な幸いを得ることができます。けれども、苦しみを苦々しく思い、神に対する怒り、また物や周囲に対する怒りを募らせれば、自分を腐らせていくだけだということです。しかし、ヨブは悔い改めないだろうと決めつけて、次の警告をします。

36:17 しかし、あなたには悪者の受けるさばきが満ちている。それでさばきと公義があなたをつかまえる。36:18 だから、あなたは憤って、懲らしめに誘い込まれないようにせよ。身代金が多いからといって、あなたはそれに惑わされないようにせよ。36:19 あなたの叫びが並べたてられても、力の限りは尽くされても、それが役に立つだろうか。36:20 国々の民が取り去られる夜をあえぎ求めてはならない。36:21 悪に向かわないように注意せよ。あなたは悩みよりも、これを選んだのだから。

確かに、苦しみに遭うと神への憤りに満たされます。しかし、それを行なえば神からの厳しい懲らしめがまっているとエリフは言います。その時に身代金を使っても、叫んでも無駄です。また、神を

知らぬ異邦人のように死ぬことを選びとっても無駄です。ヨブが神を責めている姿を見て、ヨブがますますその悪に向かっているのではないかとエリフは懸念しています。この苦しみの意味は分からないままにして、もっと悩まないといけないのに、そしてその悩みの中で神が何か語ってくださるのに、神がいけないのだと結論づけたから、あなたの身に滅びが起こるよ、と警告しています。

次回は、自然に対する、それを治める神の力強さを見て、その偉大さを述べていくエリフの説法を聞き、さらに神ご自身がヨブに現われて、自然の中にあるご自身の知恵について問い質すところを読んでいきます。